



図書館通信

天上の恋をうらやみ星祭り

高橋淡路女

7/1~7/7の1週間、今年も附属図書館で「七夕かざり」を楽しみました。「今年はまだ？」のうれしい期待の声にお応えして準備した2本の笹は、あっという間に色とりどりの短冊で飾られました。どんな願い事をしたのか、ちょっと拝見。天上の恋にあやかりたいという願いがダントツかと思いきや、「就職内定」、「単位修得」という直面している現実的な願いが多く見られました。レポート作成のために日々附属図書館で頑張る学生さんの顔が思い浮かび、これらの願い事が叶うよう共に祈りました。

今回は、本学関係者に加えオープンキャンパスで訪れた高校生も参加してくださり賑わいました。ご参加くださった皆様、ご協力ありがとうございました。



就活を応援

2014年6月12日(木)、附属図書館にライター・大学ジャーナリストの石渡嶺司さんが見学に訪れました。石渡さんは、ジャーナリストとして大学・就職等の取材活動の傍ら、学生や保護者、大学就職課、教職員団体、高校生向けに積極的な執筆や講演を行っています。

附属図書館では、企画展示「就活を応援」コーナーを設け石渡さんの著書『就活のしきたり』や『就活のコノヤロー』などを紹介しています。就職活動を既にスタートされている方はもちろん、これからの方もぜひ一読されることをお勧めします。



香川短大の皆さんへ。
矢張り(1.14巻)を
めざして、がんばってください!



2014.6.12 嶺司
石渡 嶺司

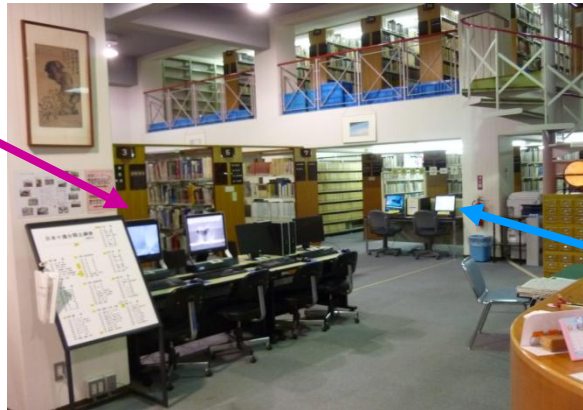
※ 著書にメッセージを書きいただきました →



インターネット検索コーナーを
リニューアルしました！



インターネット検索
コーナー



蔵書検索コーナー
(OPAC)



インターネット検索用パソコンを **2台新調** しました！
これを機に、インターネット検索コーナー、蔵書検索コーナーをお引越し。
利用しやすくリニューアルしています。どうぞ、ご活用ください。

電子書籍 丸善 eBook Library サービス開始

Maruzen eBook Library は丸善が提供する「電子書籍提供サービス」です。

附属図書館の インターネット検索コーナーのパソコン から、契約しているタイトルを閲覧することができます。(契約外については書誌情報・内容・目次情報が閲覧可能)

アクセスできるのは館内のパソコンのみですが、**【印刷/保存】ボタンをクリックすれば、ファイルをダウンロード、保存** することができます。(一度にダウンロードできるのは **60pまで**)

今回導入したのは、就職関係の5タイトルですが、今後他の分野の導入も検討しています。



- ※ ・一度に大量のデータのダウンロードは禁止されています。
- ・印刷・保存は著作権法に則った個人利用の範囲内に限られます。



利用方法など、お気軽に図書館員におたずねください。

おすすめの図書

『金子みすゞ童謡集 明るいほうへ』

金子みすゞ 著 JULA 出版局 2012年 911.58/KA



子ども学科Ⅲ部 2年
三宅慎弥

金子みすゞ童謡集『明るいほうへ』を読み経て。

小学二年だったか三年だっただろうか、金子みすゞの『わたしと小鳥とすずと』を学習したのを覚えているだろうか。

「みんなちがって、みんないい。」の締めでCM等でも取り上げられた事もあり、大変有名な童謡だ。自身問わず誰もが、ああ、そんな作家がいたな、そんな詩があったなと、そんな記憶が頭の片隅に佇んでいる事だろう。

私もそんな気持ちで、本書を手を取った。

金子みすゞの生涯は大変短く、満26歳でこの世を去った。

だが、その短い生涯の中で見た「私たちでは到底見ることができない世界」。否、「私たちが幼い頃なら感じる事ができていたが、感じていたことを忘れてしまった世界」を、彼女は美しい形で残している。

この本の楽しみ方は、「視点の差」を感じることである。

彼女の視点はとても低く、とても子どもに近いものを感じることができる。

対して、おそらくこの文章に目を通していている方はもう大人で、ある程度固有の主観を持っておられる事だろう。

その差を感じていただきたい。

ここで、本書内に登場する童謡を一つ紹介する。

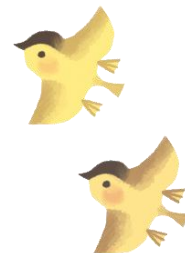
「すずめのかあさん」

子どもが 子すずめ つかまえた。

その子の かあさん わらってた。

すずめの かあさん それみてた。

お屋根で 鳴かずに それ見てた。



この一定のリズムの上にある短い文章を読んで、あなたはどんな光景を想像しただろうか。自身の視点が子どもがすすめを捕まえたところから徐々にズームアウトしてゆくを感じるだろう。

無意識に視点を操作されているのだ。

そして、「お屋根で～」の所で一気に視点が下げられる。そこではじめて視点が解放される。その時ふと感じるもの。これが金子みすゞの見ていた世界である。

かわいそうと思うか、それだけかと思うかは個々人の価値観に任されているが、一度、この童謡に登場する子どもやその子のかあさんの視点から外れる事。そこにまず私は大きな価値を感じる。

私自身読書は元より苦手で、集中力も続かず半分見栄で書物を借りたり買っていたこともあったのだが、本書を読み終えてから少しずつ活字に慣れる事ができた。

それはおそらく、「一度、自らの視点ではない視点からものを見る」ということを本書で知り、本に対する意識が「本人の見栄」から「先人の知恵」へと変わったからであろう。

結果、何事にもまず視点を一度外してから見る、言わば「事物を客観的に見る」ということができるようになり、その隠れた良さを知ることができるのである。

活字詰め of 書物に限らず、人や物、その他の何かに嫌悪感や抵抗感を覚える事があるならば、先ず本書で金子みすゞに視点を操られてみてはいかがだろうか。



編集後記

「ここや、笹あった!」、「はやく、書かんと願い事が届かんよ!」「俺も、もう1枚書く!」

七夕飾りを始めて3年目。まだ附属図書館を利用したことのない新入生が気軽に訪れるきっかけになればという思いからのスタートでした。当初の思いどおり、七夕期間中は初めて見る顔ぶれで賑わい、館員とのコミュニケーションもはかれました。思いを込めた短冊の願いを叶える力はありませんが、求める資料を探し出すお手伝いはできます。せっかくの機会、これからもどんどん利用してもらえような附属図書館に成長させたい! 思いを新たに七夕でした。

今号に寄稿してくださった、三宅慎弥さん(子ども学科Ⅲ部2年)ご協力ありがとうございました。